

クラウディーネの愛
ヴェローニカの誘惑

ローベルト・ムージル
田中 一郎 訳

青山ライフ出版

カバーイラスト

渡邊紅月

Kouzuki Watanabe

褪せたざくろの唇

ミクストメディア

30 × 42cm

2010

Courtesy Gallery Q

装幀

溝上なおこ

Naoko Mizoue

目次

ヴェローニカの誘惑……………81

クラウディーネの愛……………5

クラウディーネの愛

「あなた、本当に一緒に来てくれないの？」

「無理だよ。分かっているだろうけれど、今すぐ仕上げなければならぬんだ。」

「でもリリーが喜ぶだろうし……」

「確かにそうだけれど、行くことはできないな。」

「それに一人で出かけるのは気が進まないの……」

妻は紅茶を注ぎながらそう言つて、夫の方を見た。夫は部屋の隅で淡い花模様の安楽椅子に座り、煙草をふかしていた。夕方だった。濃緑色の日よけが外の通りへ顔をのぞかせ、他の濃緑色の日よけと長く連なり、区別できなかつた。それはまるで重く静かに閉ざされた両まぶたのように部屋の輝きを隠し、中では紅茶が今くすんだ銀色のポットからカップへと注がれ、軽い響きを立てて、まるで薄い麦茶色の鉾物からなる透明なねじれた柱のように停止して見えた。ポットの表面には緑色や灰色の影が映り、さらに青色、黄色が映っていた。まるでその場所に合流したがそれ以上は混ざらないというように、色はそのままの状態を保っていた。妻の手はそのポットから伸び、夫の方を向いたまなざしとの間に、ぎこちない硬い角度を形成した。その角度は誰も見ることのできるものだった。だがそれを異なつたもの、ほとんど自分の身体に関連する角度として感じるのはこの二人だけだった。二人は最も硬い金属からなる支柱が自分たちの間に張られ、自分たちをその場所にしっかりと押さえ付け、だが離れているにも

かわらぬ互いを一体に結び付け、それがほとんど体で感じられるような気がした。それはみぞおちの上に当たっていて、二人はそこに圧力を感じ、平静な表情と相手を見据えるまなざしとを保ったまま、安楽椅子の座面の高さにしっかりと押さえ付けられていた。けれどもまた、当たっているところに優しい動きを、何か軽いものを、まるで小さい蝶の二つの群れがまざり合ってはばたくような心臓の動きを感じるのだった。

部屋の全体は、まるでかすかに震える軸に支えられるようにして、このかすかな、決して現実のものとは言えないが、しかしそのように知覚される感触によって支えられ、そのためその軸が当たっている二人によって支えられていた。部屋にある物たちは呼吸を止め、壁に映る光は金のレースへと凝固した。すべての物が沈黙し、待機し、二人のために存在していた。終わりになく輝きながら世界を流れるひとすじの時間は、この部屋の中心を流れ、また二人の中心を流れていたが、突然その流れは止まり凝固し、硬く静止して輝いた。部屋にある物たちは互いに少し近づいた。そこには溶液中に突然面が現れ結晶が析出するときのような、まず静止した状態があり、それからゆっくりとした降下があった。二人の周りに結晶が生じ、その中心軸は二人を通り、二人は突然、部屋にある物たち、呼吸を止めて反り返り、二人によって支えられている物たちを通して、まるで無数の輝く結晶面を通すようにして互いに見つめ合い、まるで互いに初めて相手を見つけたように、さらにもう一度互いに見つめ合った。

妻は紅茶のポットを降ろして手をテーブルの上に置いた。幸福の重みを存分に感じ尽くしているかのようにもう一度それぞれの椅子に沈み、しっかりと見つめ合っている間、微笑みながらも考えにふけっているようであり、自分たちのことを話そうという気はまったく起きなかった。それで二人はある人物のことをもう一度話した。二人が読み終えた本の中のある登場人物についての話だった。まるで今そのことを考えていたというふうには、実はそんなことはなかったのだが、いつも決まった個所からすぐに質問を始め、それによってたった一つの会話を再開し、二人はそんな変わったやり方でその会話からもう何日も離れようとしなかった。それによって外見を保ちながら、本のことを話している間、本当は違うことを考えているのかもしれない、実際にしばらくすると二人の考えはこの無意識の口実からまた気付かぬうちに自分自身のことへと帰っているのだった。

「このGのような人物は自分のことをどう思っているのかしら。」妻は尋ねて会話を始めた。自分の考えに沈み、ほとんどひとりの言のように続けた。「彼は子供を誘惑し、若い娘をそのおかし、恥ずかしい行為をさせる。それからその場に立って、微笑んで、すっかり魅入られたように、自分のどこかに稲妻が走るような弱い輝き、わずかな性の刺激を見つめている。彼は自分が悪いことをしているかと思っているのかしら。」

「思っているかもしれない。あるいは思っていないかもしれない。」夫は答えた。「もしかす

ると、その種の感情についてはそんな問いかけをしてはいけないのかもしれない。」

「でも私はこう思うの。」妻は言った。今の彼女はその発言によって、たまたま話題に上った人物のことを話しているのではなく、彼女にとつてその背後ですでに何かある種の考えがはっきりしつつあることを示していた。「私は、彼が自分は良いことをしているとと思っている気がするの。」

二人の考えはしばらくの間黙つたまま並行して進み、それからかなり離れたところで言葉となつて姿を現した。互いに手に手を取つてまだ沈黙を続け、もう話はすべて終わつたかのような時点での、突然の出来事だった。

「彼は犠牲者たちをいかがわしい行為によつて傷つける。彼は自分が彼女たちを墮落させ、彼女たちの官能をかき乱し、決して終息の安らぎを得ることのない興奮の中へ連れていくことを知っている。それなのに、彼はまるで微笑んでいるように見える。その顔は柔和で青白く、悲しそうでいて決心したような、優しさに満ちた表情をしている。そのように優しさに満ちた微笑みが彼と彼の犠牲者の上に浮かんでいる。まるで雨の日、大地の上において、空から送られたものだと分らないように、彼の悲しみの中に、残酷な行為の裏にある彼の感情の中に、すべてが弁解が存在している。脳の働きはどれもどこか孤独で仲間のいないものなのかしら。」

「そう、頭脳はどれもある意味で孤独なのではないか。」二人は今また話すのをやめ、共通

の第三者、二人にとっての他者であり、あまたいる第三者の中の特定の人物のことを考えた。まるで連れ立ってある風景の中を歩いていようだった。木があり、草原があり、空があり、だがなぜここは晴れていてあちらは雲に覆われているのか、急に分からなくなった。すべての第三者は大きな球体のようになって周りに存在している気がした。人を閉じ込め、時によそよそしく、ガラスでできているように見え、鳥の軌跡が予想もつかない方向へよろめいてその上に裂け目が走り、寒気を感じるような、そんな球体だった。急にこの夕暮れの部屋の中が寒く、広く、真昼の明るさの孤独に変わった。

それから二人の内の一人が話し始めた。静かに弦を弾くような声だった。「彼はまるで扉を閉ざした家のようなもの。おそらく彼の中では、彼がしたことは穏やかな音楽のようなものなのに、誰もそれを聴くことはできない。おそらくその音楽によってすべては穏やかな悲しみへと変わってしまうのだろう。」

もう一人が答えた。「おそらく彼は自分の中をずっと手探りで進んで扉を探していたのが、やっと最後に立ち止まり、静かにただ厚い窓から顔をのぞかせ、遠くから愛しい犠牲者たちを眺め、微笑んでいるのだろう。」

その他に何も言わなかった。だが幸せにもつれ合う沈黙の中にはもつと高くもつと遠くへと響くものがあった。

「ただこの微笑みだけが彼女たちのもとへ届き、彼女たちの上に漂い、血を流し痙攣するおぞましい姿からさえも細い花束を編む。彼女たちがその花束に気付くだろうかと優しくためらって、花束が落ちるにまかせ、決心したように昇っていく。孤独の秘密からはばたく翼によって運ばれていく。何もない空間を見たこともない生物が飛行する物語のように。」

二人はこうした孤独の中に二人でいることの秘密があると感じていた。二人には周りの世界について、互いに寄り添っているようなほんやりとした感覚があった。そこでは互いに支え合い、重みをあずけ、重なり合っている箇所を除いてあらゆる方向から夢の中のような寒さを感じていて、二つの互いにびったり合わさっている片割れのように、つながって一緒になることによって自分たち以外の境界部を少なくするとともに、その内側で相手とどこまでも混ざり合うような気がしていた。ときおり二人は最後まで一緒になれないことが悲しかった。

「あなたは覚えているかしら。」突然妻は言った。「何日か前の晩にあなたが口づけをしたとき、気付いたかしら、何か余計なものが二人の間にあったの。そして同じとき、何かが頭に浮かんだの。本当にどうでもいいことだったけれど、あなたのことではなかった。あなたのことでなくてもよいということに、私は急に悲しくなった。私はそれをあなたに言うことができず、あなたはそれに気付かなくて、しかも私がすぐそばにいると思っただけから、初めは微笑まずにはいられなかった。それから私はもう何も言う気がしなくなつて、あなたがそれを感じ取っ

てくれないから腹が立った。そしてあなたが愛してくれても私にはもう届かなかったの。でも放っておいてほしいとあなたに言う勇氣はなかった。だって実際には何もなかったのだし、私は実際にあなたのそばにいたのだから。けれども同じとき、私はあなたから離れ、あなたは私の前からいなくなってしまうのかもしれない、というはつきりしない予感のようなものがあつたの。あなたはこんな気持ちになつたことはあるかしら。あらゆる人間が、突然二つの姿に見えることがある。誰もが知っている充実してはつきりとした姿と、それからぎよつとする青ざめた生氣のない姿と。まるで気付かぬうちによそよそしい存在になつていて、私ではない人のことを見つめているみたい、というようなこと。私はあなたをつかまえて、私の中へ連れ戻し、それからもう一度あなたを突き放して、自分の体を床に放り出したかつたのかもしれない。そんなことができそうな気がしたの……」

「あのときのことかい。」

「ええ、あのとき私はあなたのもとで急に泣き出したの。分かると思うけれど、もつとあなたの気持ちに近づきたいという思いを抑えられなかつた。怒らないで。あなたに言うべきだけだけれど、私はただそんなふうに想像しただけで、なぜか分からないけれど悲しくなつて、きつとそのせいでこのGという人物のことを考えたのだと思うの。分かってくれるかしら。」

夫は煙草を置いて椅子から立ち上がった。二人の視線がしっかりと相手をとらえ、一本の網